

未来に生きて働く探究力と省察性の育成

生活科の本質

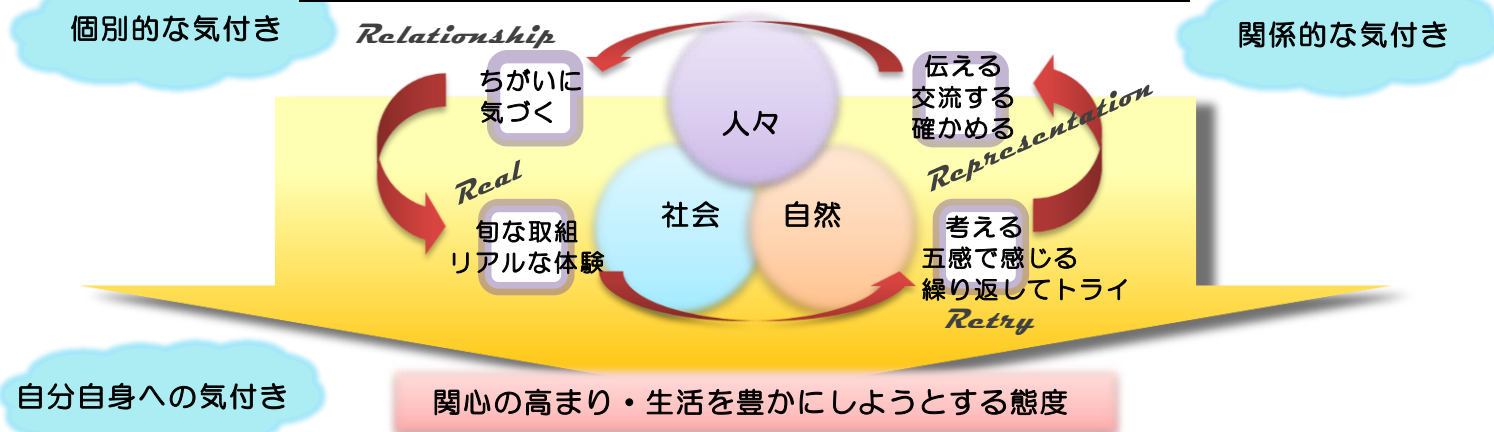
生活科における具体的な活動や体験は、子どもの生活の全てが対象である。実生活の中で自分自身や身近な人々、社会、自然の特徴やよさ、それらの関わり方などに気付く。そして、必要な習慣や技能を身に付け、身近な人々や社会、自然を自分との関わりで捉えようとする。その過程で、自分自身や自分の生活について考え、自ら表現し、身近な人々、社会、自然に働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしたりするものである。

また、五感を通したリアルな活動や体験を、各教科等の内容と関連付けることで、人々・社会・自然に関わる見方・考え方を生かし、多様に表現しながら探究しようとする態度を育てることをねらいとしている。

生活科の目標及び育みたい探究力と省察性

生活科の目標	具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成する。
育みたい探究力	身近な人々・社会・自然に関わり、考え、判断し、表現することで、具体的な個別の対象に対する気づきを深め、探究力の基礎を養う。
育みたい省察性	実際に体験しながら思考や表現を繰り返し、改善策や願いを生む活動を通して振り返り、省察性の基礎を養う。

生活科における探究のプロセスをとおした学びのイメージ



探究力と省察性を育む指導

子どもが繰り返し関わりたくなるひと、もの、ことと季節や旬を逃さない出合いを演出する。失敗しても何度も繰り返して試す中で、それぞれの子どもが前回とは違った課題を持ち、関わり方が変化していくことと、気付いたことを表現する活動を充実させることで、自己の認識を確かなものにしたがり、無自覚だったものが自覚化したりして、気づきの質を高めていくことが、低学年の探究の姿である。さらに、それぞれの気づきの違いに目を向けさせ、感じ方や考えの違いを認識させ、ひと、もの、ことへのよりよい関係づくりを指導し、体験したこと、気付いたことを自分の生活や他の学習に活かせるように支援する。

- (1) リアルタイムかつリアルな体験：Real (2) 繰り返し関わり続ける体験：Retry (3) 多様な表現活動の充実：Representation (4) 人との関わりと異質性の認識：Relationship

4 R

研究の評価

子どもの対象に向かう行動、対象に対する言葉、表現する過程や表現したもの、ワークシートなどの記録や振り返りを用いて研究評価を行う。上記の4観点を重点にし、研究評価をすることで子どもの探究力の基礎を養えるよう指導を改善していく。